
レモンスカッシュ

百時 紅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レモンスカツシュ

【Nコード】

N5826R

【作者名】

百時 紅

【あらすじ】

伝説の三刀流剣士ノア。鮮血色のスナイパーリリス。そして、純白の黒魔術師デルタ。彼らを中心とした物語です。なんかこうスカルトするようなお話ができればいいと思っています。

説明

世界凶悪囚人収容所、通称「デスルーム」

そしてその収容所から脱走した囚人を捕らえる、専門の資格を持った者があつまる「アスキート」

そしてこの物語はアスキートのトップクラスの実力を持った三人を中心に廻っていく・・・

アスキートにはA～Zまでのクラスがある。

そしてそのクラスのなかでもまた実力によって番号があつた。

Aクラス?01

・・・のよつにあらわされる。

下記はそのAクラスの?トップ3である。

Aクラス?01：デルタ

Aクラス? 02:ノア

Aクラス? 03:リリス

最恐の3人に立ち向かえる囚人ははたしているのだろうか・・・

あきれた三人

「……………ねえケヴィンさん」

「なんですか?」

「彼らって、何者なんですか…………?」

「そうですね…………私がこの世でいちばん強いのではないかと恐れる三人とでも言っときましようか」

「ですよね…………っていうか…………」

「椿、如月、神無、いくぞ」

「」「了解」「」

バシユツッ

「狙いにズレなし…………いきます!」

ズドーンツッ

「ブツブツ・・・闇切」

ザシユツツ

「これはありえないでしょ!!!」

アイリは気がつけば叫んでいた。

それはもちろん目の前で悪そうな山賊といきいきと倒している3人、
を見てのこと。

今回アイリは「アスキート」という罪人や囚人をとらえたりするところ
に訪れ、村を山賊から守ってほしい、と依頼した。

来たのは、このめちゃくちな3人と3人を案内するアスキートの
スタッフ、ケヴィンだった。

たしかにありがたいのだが、この3人は強すぎる。

だから、ありえないのだ。

「なんかあの三刀剣をもってるひとは剣に向かって話しかけてるし！！ 金髪のショートの子は銃を両手にもって乱射してるし！！ あの真っ白な服着た人はなんかブツブツ言ってたおしてるし！！」

「では、私が説明しよう。」

「あそこで三刀剣を持っている長い黒髪を後ろで高くまとめているのが、ノア。アスキートでは伝説の三刀流剣士と呼ばれている。」

「はあ・・・」

「ノアが話しかけているのはどうやらその三刀の精霊のようだ。ノアには見えているようだが、他のやつにはまったくみえていない。」

「え」

「そして金髪のショートの方は、リリス。普段は天然なふつ々の女の子だが、銃をもつとかなり強くなる。あらゆるポケットから銃をとりだすが、一体何丁もっているのかはだれにもわからない。通称鮮血色のスナイパー」

「こわっ」

「んで、真っ白の服をきてる男はデルタ。彼がこのなかでおそらく一番強い。黒魔術が専門でほかの魔術師が50年かかって会得した闇切をあいっは一か月で修得した。ほら、あの技だ。」

「おおおう・・・」

「ほかにも神の領域と呼ばれる魔術をいくつか修得しているときいたことがある。あ、あと魔術をつかうときにブツブツというのは呪文を唱えているから、だそうだ。通称純白の黒魔術師」

「へえー・・・」

「と、まあざっとこんなもんですね」

「おーいケヴィンくん。アイリさん。おわったよー！」

みれば、銃をどこかにしまったりリスが笑顔で手をふっていた。

リスのまわりは。血の海。

「うえ・・・リスって子が鮮血色って呼ばれてるのがよくわかった・・・」

「でしよう・・・」

「アイリとかいう女。これで依頼のほうはいいか？」

三刀の剣をおさめながら近づいてきたのがノア。

「あ、はい。ありがとうございますっ！」

「あーあ。だりい。帰って寝るかな」

あれだけ血が舞ってたのに返り血を一滴も浴びてないデルタもきた。

「三人ともお疲れ様です。では、本社にもどりましょうか。」

アイリはあわててお礼を言った。

「あっみなさんほんとにありがとうございます！ これで村は安全ですっっ！」

「またなんかあつたら言ってねん」

「・・・べつに貴様のためじゃない」

「おーよかったな。てかてめえ名前なんだっけ？」

リリスは別として、ノアはじゃあなんのためにきたんだろう・・・てかデルタ、失礼ね、最初に自己紹介してじゃないっ！

アイリは心の中であるく憤慨したが笑顔を保った。

「では依頼人アイリ・レイラ様。お疲れ様です。」

「はい！ ケヴィンさんもありがとうございますっ！」

だんだん小さくなる4人の背中をみて、アイリは思った。

「なんてめちゃくちゃな人たちなんだろう・・・」

ドキドキ肝試し！？ ～廃病院で～ 前編

「ロクサス病院？」

「ああ。」

デルタはアスキートの仕事受付人、ユイカの部屋を訪れていた。

「・・・そこってゆーれいがでるってうわさの？」

「もちろんだ。」

がくっ

デルタはうなだれた。

いや、デルタ自身は黒魔術をつかうだけあって、別に幽霊がこわいわけではない。

問題はノアやリリスだ。

リリスはまだいいとして、ノアは幽霊やなんかは大嫌いだ。

「こんな仕事を受けてきたといったら、ノアになにされるか・・・」

「ふん。Aクラスの？1の実力をもつものが、こつも情けないとはだれも思わないだろうな。」

「うっせ・・・で、仕事の内容は？」

半ば投げやりにデルタは聞いた。

「デスルームS級の罪人、エヴァ・レガンス、だ。」

「へーえ。エヴァ・レガンスか。ん？ S級??」

「そうだ。たしか罪状は・・・」

デスルームのS級の罪人なら、アスキーにいるやつは大体知っている。

大量殺人とか、残酷な罪を犯してきた罪人だから。

だけど、、、

「エヴァ・レガンス、なんてやついたっけな・・・」

デルタは一人ぼやいた。

「ああ、あつたあつた。罪状は、大量殺人。どうやら医者だったらしい。患者にまったく逆効果の薬を与えて、約100人は殺したそうだ。」

「そりゃS級にもなるわな・・・。」

「さて。仕事の内容はしかと言い渡した。ちゃんと遂行してこいよ。」

「わかってるよ。」

クソ。どうなってもおれはしらねーぞ。

デルタは悪態をついた。

ロクサス病院前。

「・・・デルタの大馬鹿者。あとでクロス。」

「しよ、しよーがねえだろーがよ。おれだって好き好んでこんな仕事受けてきたわけじゃねーんだよ。」

「だからといって、こんな、こんな、」

「こんな廃病院で仕事をしろというのかアアアアア！！！！！」

ノアは叫んでいた。

真夜中の、静まり返った病院の前で。

「うるっせえぞノア！！ レガンスにばれたらどうすんだ！」

「ふん。それはそれでいい。逃げられたと言って帰ってくればいいのだからな。」

「ふざけんな。また給料減らされる。大体なあ、毎回おめえのせいで結構な額いつてる仕事も半分ぐらい減らされちまうんだよ！！」

「なにい？ 聞き捨てならんな。すべて私のせいだというのか？」

「あたりめえだよ！ この前の盗賊退治のときだっておまえがあんなにやりすぎなければ・・・」

ぎゃいぎゃと騒ぐ二人のすぐそばにリリースはいた。

今回の仕事は、乗り気ではない。

「はあ・・・」

「？ リリス。どうかしたのか？」

リリースの様子に気づいたノアが聞いた。

「・・・今回の仕事、あたしあんま行きたくないんだあ・・・」

「ああ。わかるぞ、その気持ち。やっぱりおまえも幽霊がこわいのだな。安心しろ。すぐにこの糞男を始末してやるから。」

「なにイー!?」

「あ……うづん。そうじゃなくて。レガンスのことなんだけど……」

「このあと、驚愕の事実をふたりはしることになる……」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5826r/>

レモンスカッシュ

2011年10月6日19時50分発行